

体育科教育学研究室

岡出美則

人間総合科学研究科助教授

1. 体育の授業のイメージ、体育教師のイメージ

体育の授業に対して一般の人たちはどのようなイメージをもっているのでしょうか。

体育といえば、国際的にポピュラーな競技種目を教えてくれる教科というイメージをもつ人が多い。他方で、スポーツは楽しければいいのであり、そこで技術や戦術を教えてもらえるとは思っていてもいなかったという人も多いのではなかろうか。あるいは、結局、運動神経のいい人たちだけがいい思いをする教科であるという印象をもっている人も多い。

この印象は、自分が何かを学習し、向上したという経験をしたかったのに、それが保証されなかったという不満の裏返しといえる。当然、このイメージは、体育教師のイメージにも反映している。体育教師とは運動が全般的にできる人になっているとのイメージである。

しかし、最初に確認しておくべきことがある。中学、高校では教科の名称は「保健体育」であり、中学、高校で体育の教師になるには「保健体育」の免許取得が不可欠である。専門職として自立的に働けるようになるには、当然、個人の経験を超えて身につけていくべき知識や技能が存在している。

2. 「秘密は何もない」とは言うけれど

ところが、教育実習から戻った学生や現職の教員からは、必ずといっていいほど次の発言がみられる。

「大学での授業は何も役に立たなかった。結局は経験ですよ。」

しかし、「アメリカの教育の最大の失敗は教師が生まれてくると考え、育てられるという認識をもたなかったことだ」と言われる。実際、同じ年数、教員としての経験を積んでも、5年、10年とたてば教師として

の力量に大きな差が出てくる。

「名選手、必ずしも名コーチならず」と言われるように、選手としての成功は必ずしもコーチとしての成功を保証しない。それは、保健体育の教師にしても同じである。時間がたてば、生徒を引きつける授業を展開できる教師とそうではない教師が必ずといっていいほど分かれていく。他方で、授業が上手と言われる保健体育の教師に何に配慮しているのかと問うと、「特別なことなど何もしていない」という素っ気ない返事が返ってくることが多い。あたかも、自分は生まれつき教えることが上手だといった発言である。それは、演劇家ビター・フランクルの言った「秘密は何もない」といった言葉のようである。

このずれの背景には、次の諸事情が考えられる。

- 1) 教員養成を目的として研究が進められていない。
- 2) 研究成果が間違っている。
- 3) 講義が研究成果を正しく反映していない。あるいは、研究成果の伝え方が間違っている。
- 4) 研究成果を適用する条件が異なっている。

3. 体育科教育学で生み出されている知見の身につけ方

このことは、保健体育の教師としての力量形成に向けては、専門科学の研究成果を上手に身につけていくが必要になることを示している。しかも、それらは、単に知っているだけではなく、生徒の前で実際に活用されなければならない。具体的に考えたい。

保健体育の授業のうまい教師は、生徒の掌握術に長けている。しかし、生徒の掌握術に長けている教師は、実際に授業中に何をしているのであろうか。その一つの解答が誉め方である。実際、生徒から高い評価を受けている保健体育の教師は、授業中に生徒に頻繁に話しかけている。保健体育の教師は、授業中に話しかけないと思っている人も多いが、実際にはそうではない。しかも、その言葉は肯定的な言葉が多い。体育の教師から怒られたという記憶はあっても誉められた記憶は少ないという人も多いであろう。しかし、生徒の評価する授業をしている保健体育教師は、そうではない。約束事の明示等、事後処理に追われないための予防的な措置を組み込んでいる。これは、教師のコミュニケーションと教科の指導内容に関する知識解明に向けて取り組まれたきた研究の成果の一端である。

もっとも、この知見を学生や現職の教員

に伝える際にはいろいろな方法が考えられる。例えば、次のやり方がある。

「今から、二人一組になってください。そして、相手の人を誉める言葉を20書き出してください。時間は5分です。5分後に、お互いに書き出した言葉を相手の人に言ってもらいます。どちらが先に話すかも決めておいてください。」

様子を見てみると相手の顔を見ながら、笑いながら言葉を書き出している人もいれば、誉め言葉が見つからずに頭を抱え込んでいる人も出てくる。最初の5つ程度は思いついても20となると結構難しい。そして、時間が来た時点で互いに誉め合ってもらう。すると、相手が発した誉め言葉にうれしそうに反応している姿があちこちにみられるようになる。しかし、中には、「思ってもいない誉め言葉など言うことができない」と頑なに拒む人も出てきたりする。あるいは、「思ってもいない誉め言葉など言われてもうれしくない」といやな顔をする人も出てくる。

これは、一例である。しかし、保健体育の教師としての力量形成に肯定的に機能したり、否定的に機能する知識、技能、価値観を端的に示している。例えば、人を誉める言葉をどの程度知っているのか、相手の人の良さを見いだす観察の仕方をどの程度知っているのか、見つけた良さはどのよう

に伝えると相手に伝わるのか、相手を誉めることにはどのような価値があると考えているのかといった具合である。

保健体育の教師は、授業中にこれらを瞬時に使い分けが必要になる。しかし、実際の授業では、40人近い生徒に一度に対応することになる。当然、観察方法について一定のノウハウのない教師は、伝えるべき生徒に伝えるべき内容を伝え損なうことになる。

運動の不得意な生徒には、できる限り細やかに誉め言葉をかける。しかし、あまり細かなことを数多く言わない。その生徒が、自分の行っていることに自信を持てるように、また、教師が自分のことを気にかけてくれていると感じることができるように対応することが求められる。逆に、運動の得意な生徒には、学習している内容に即して専門的な知見を本人が納得できる形で提供できるようにしていく。生徒に応じた言葉のかけ方と言っても、この程度の配慮が必要になってくる。

しかし、これらを使いこなせるようになるのは意外に難しく、時間がかかる。誉めるためには、教える内容、生徒を理解する方法、授業の進め方等、異なる知識群や技術群に精通していることが必要になる。それだけに、限られた時間の中でこのことを意識しながら、学部や大学院生を対象に専門

科学の知見を効果的に伝える方法を工夫することは、そのまま、保健体育教師の育成プログラムの検討につながっていく。専門科学の知見は、単に知るためではなく、実際に活用されるために生産されているのである。

4. 研究室で取り組んでいる課題

私たちの研究室では、保健体育のカリキュラム開発、学習指導論、保健体育の教師教育という三つのテーマに取り組んでいる。ここ数年、取り組んできたテーマは、球技のカリキュラムや学習指導モデルの開発、大学生、大学院レベルでの教師初心者力量形成モデルの検討、学習者、特に体育の授業の苦手な生徒の学習行動の検討、カリキュラム開発に関わる国際的な動向調査と多岐にわたっている。

本研究室は、これらのテーマに取り組むに際して他の大学にはないメリットを備えている。修士課程、博士課程を含め、学生が現職の教員とともに授業を創り、その成果を検証していくシステムが整っていることである。

例えば、毎年、埼玉県、千葉県、茨城県からの研修生の現職の教員が、本研究室で研究を進めている。そのため、上記のテーマに即して、教員も交えながら、学生と現職の教員が検討を重ねることになる。この過

程では、当然、授業をする現職の教員の方が先行の研究成果に納得していく過程をいかに生み出すのかが問われることになる。さらには、既存の研究成果そのものを再吟味する過程が必要になる。

他方で、体育の授業に関わる実証的な研究は、実験室で行う研究とは異なり、制約が多い。一つの単元でデータを取り損ねると1年間待たなければならないことも出てくる。しかも、一度に数多くの学校でデータを蓄積する方法はとりにくい。このような条件の中で地道にデータを蓄積している。当然、学生は授業をみる機会も多くなるし、目も肥えてくる。

加えて、特に、ここ10年程度の間に、国外の一流の研究者との交流の機会も増えている。この過程では、諸外国においても同じような問題に直面し、その解決に向けて地道な努力が重ねられていることがはっきりと見えてくる。これらを上手に活用しながら、学校現場の要求にも的確に対応でき、国際的にも活躍できる人材育成を目指している。このような趣旨に賛同してくれる人が多く集まってくれることを期待している。
(おかで よしのり／体育科教育学)